

大里製粉所の赤煉瓦等の思い出

相模原市 菅原光保

昭和四七年夏、一万三千屯収容穀物サイロ完成直前の日本製粉株式会社門司工場に約七年ぶり二度目の勤務として着任した私は、同サイロに続いて、精進原料タンクの建設、製品倉庫の一部改築サイロ化等一連の合理化工事を行いました。同工場はかつて明治の昔、◀附属土蔵倉庫。中間は渡り廊下左手一部白色の部分が現事務所



神戸の鈴木商店が大里製粉所として建設されたもので、その建物の大部分が赤煉瓦造りであります事は御承知の事でしょう。工事は一流会社のM社の請いで、時流に即した合理化工場実現の期待をこめて開始されたのですが、着工日ならずしてその進捗状況が予想外に足踏し始め、果ては旬日にして現場責任者から場合によっては見積り変更を願うかもしれぬ等と思ってもよらぬ話が出て、驚き理由を糺しますと、用地確保のため取り除く予定の旧建物が堅牢にすぎて簡単には壊せず、特に基礎部分はどうなるか見当もつかぬと言うのです。そこで関係者相寄り現場を詳細に再調査した処、構築基礎資材の赤煉瓦は全て、MADE IN ENGLANDの刻印がありその堅さは瞠目すべきものでとても日常目にするものとは比較にならず、赤煉瓦を積むに当っては、六面の継ぎ目のセメントに針の先でついた程の間隔も無

い細心の仕事が行われており、又煉瓦の積み方も、穀類等の積付同様ハイ組みが取り入れてある等、思いもかけぬ厳しい入念な工事が行われている事を発見し大いに驚かされると共に、それ等の事を前にして、大里製粉所は明治三七八年頃の完成と聞いており、七十年もの昔、漸く文明開化の波が寄せて来たばかりの時代、如何に鈴木商店が世界に雄飛せんとする大陸経営のための拠点の一つであったとは言え、大西洋の彼方からはるばる優秀な資材を運び、技術の粋を集めて揺ぎないかかると大城郭を構え様とされたのかを測り、その気宇の壮大さや、工事に込められた人々の真心に想いをいたした時、感慨ひとしおで、言葉では表現出来ぬ男の大口マンとでも言う様なものを感じたのは私一人ではなかったらうと思われまます。苦勞させられたこれ等赤煉瓦の仲間は今尚、建設当時の俣の事務所や倉庫には無数に残っておりましようが、日粉社は過日、同工場を数年後に博多港頭に移転する計画を発表されており、これ等赤煉瓦の余命も永くないかと思うと懐古趣味からではなく、歴史の証人として

その建物の一つでも永久保存出来ぬものかと願わずにはおられませぬ。又同工場の現事務所は鈴木商店の頃は同門司支店であったもので、時の支配人金子直吉翁が門司に來られてはその滞在間厳しい指揮をとられたり、時には身辺なりふりに大変おうようであった？翁は着のみ着の俣、ソファーにゴロ寝で泊られた事もあると言う執務室が、今日でも当時のマントルピース等をその俣残して、応接室又は工場長室として保存利用されております。この他に土蔵、その他見る方が見られたら、当時の面影を残した遺構は数多いものと思えます。金子翁の門司に残されたお話は、終戦直後の門司工場初勤務当時、囑託として在勤されていた大江長蔵様から数多くお聞きしたのですが若年不勉強にしてまだ翁に関する知識に乏しく関心も薄かった故か深く心に留める事もなく今日ではその殆んどの事を忘れており、大変口惜しい思いと共に後悔している次第です。大江様は当時既にお年も七〇才に近く、大里製粉所建設の時、原料係として鈴木商店神戸本店から派遣されて来門、以來



▶現在の応接室のマントルピース元支配人室であったと伺っております

日本製粉社まで引続いて勤務されていたもので、丹波の御出身との事でした。辰巳会員の皆様の中には御存知の方もあってはならないでしょう。大江様の麦に関する御造詣の深さは大変なもので、内麦等は包装吠俵を一瞥してその生産県郡まで位ピタリと当てられるし内外麦を不問、ひと刺しひと握りの感覚で水分等級を判別される等自分の掌を、後年開発された自動水分検知器同様の能力を発揮されるまでに研鑽向上されていたと言つても過言ではなく、及ばずながら私達後輩もそれに一步でも近づこうと目標にして努力したものでした。この大江様と共にMADE



IN ENGLANDの赤煉瓦は、無私、誠実努力、実行等が、如何に大切な事であるかを現実をもって教えてくれた貴重な存在であります。その価値あるものを、思いの俣使駆された明治の大先達の識見偉業には唯々畏敬の念を捧げるのみ

です。

「後記」 一月下旬神戸に、格別の御指導御交誼を賜っている辰巳会幹事小倉五郎様を御訪ねした際ふとした事から日粉門司工場に金子翁の執務室が残っていると話した処、その場でそれを書けとの御厳命、お断りしてもとても許してもらえない相手ではなく、恥ずかしながら拙文を綴ってみました。何か御記憶等に触れる事がありましたら幸いです。

賀陽宮邦寿殿下を

迎えて

故西川玉之助翁の遺業を讃える

明治四十二年十月満洲ハルビン駅頭で時の初期韓国統監伊藤博文公を射殺した韓国民族主義者安重根が処刑の前日、当時翻譯官として従事された西川玉之助氏へ謝意として遣した「庸工難用連抱奇才」の尊ぶべき墨蹟、去る昭和四十二年七月十三日柳田義一氏等に依つて韓国政府へ贈呈したところ、

同国文鴻周文教部長(文相)官名の感激に充ちた感謝状が寄せられた同年十一月八日神戸韓国領事館に於いて、季源達領事から西川玉之助氏(代理として西川家執事出席)柳田義一氏等協力の四名に各々感謝状が手渡された。其の直後法徳寺劉和尚の肝入にて日韓合同の法要を志されたが社会情勢之を許さず中絶のま、今日に至った。然るところ本年四月四日(金)朝日新聞の報ずるところ別の資料が出たのがきっかけとなって日韓関係者の手でソールに於いて安義人の慰靈祭が行われたとある。

茲に西川玉之助翁の遺志を継いできたわれわれとして忍び得ないので去る五月十一日京町竜鳳に於いて賀陽宮邦寿殿下を迎え、会食の上劉法徳寺和尚、柳田義一氏、崔瑛城氏と共に日韓親善の御力添えを協議したが、爽快な殿下の御姿に接したわれわれは感激に堪えなかつた。出来得れば日韓合同の慰靈祭には西川玉之助翁の御冥福と共に是非実現したいものである。近く実行委員会も組織の上是非成功を見たいものである。

・写真右から 崔瑛城氏 柳田義一氏 賀陽宮殿下(前列中央)劉和尚